



とーや湖

さざなみ通信

秋の洞爺湖町成香付近

ごあいさつ



院長 中谷 玲二

1年前の本号にて7月初旬の『西日本豪雨災害』や9月4日に日本に上陸した『台風21号』のことをお伝えしました。今年は狙いをすましたように台風が次々と日本に上陸し、9月9日に千葉県に上陸した『台風15号』は停電や断水など大きな被害をもたらし、10月12日に伊豆半島に上陸した『台風19号』は、関東や東北などの広い範囲で21もの河川の堤防を決壊させ、多数の死者・行方不明者が報告される激甚災害となりました。単に堤防を高く積み上げるだけでは自然の猛威には敵わないことを、まざまざと見せつけられた形になりました。亡くなられた方々には心よりお悔やみを申し上げ、被災された方々の復興・復旧が順調に進むことを切に願っております。

奇しくも16歳のスウェーデン人環境保護活動家であるグレタ・トゥーンベリさんが、9月23日にニューヨークで開催された国連気候行動サミットで演説しました。彼女は約60ヶ国の首脳や閣僚の前で「絶滅の始まりです。あなたたちが議論しているのは、お金や永遠の経済成長というおとぎ話だけ、許せない!」、「あなた方は、私の夢や私の子供時代を空っぽな言葉で奪った!」と強く非難しました。日本への台風の直撃が増えた原因の一つとして地球の温暖化があると言われており、防災に予算をかけるだけではなく、幅広い世界規模での取り組みは待たなしと思います。

さて、9月20日のロシア戦の勝利から始まったラグビー・ワールドカップに日本中が興奮しました。かく言う私も『にわかラグビーファン』の一人ですが、食卓で箸やジョッキを握りしめながら声を出して応援しました。10月20日の南アフリカ戦には敗れましたが、ベスト8への進出は胸を張れる快挙であり、日本人の多くに勇気を与えてくれました。ここで日本代表選手31人のうち15人が外国出身であることに驚かれた方は少なくないと思います。日本国籍でなければ代表選手にはなれない野球やサッカーなどのスポーツと違い、ラグビーは国籍にとらわれない独自の選考基準があり、これはラグビーのルーツと深く関係しています。19世紀初めにイングランドで誕生したラグビーですが、大英帝国の拡大とともに多くのラグビー経験者が世界各国に散らばりました。彼らが

赴任先でラグビーにとり組んで各地で普及させていったと言われており、そのような背景から選手の国籍よりも、選手が生活している国や地域を重視する考え方が生まれたとされています。

多国籍の選手が代表を務めているのは日本に限ったことではありません。どこのチームも多国籍であり、選手間の会話に限らず試合中の審判から選手への説明にも英語が用いられています。それぞれの訛りがある英語を理解するためには、相手の話を良く理解しようとする姿勢がとても重要であり、それがチームワークには必須のこととされています。『ワン・チーム』や『ワン・ハート』という言葉も皆さんはご存知だと思います。日本代表が言葉の壁があるからこそ、人種の壁があるからこそ、大切にしてきた言葉です。「すべてを犠牲にしてここまでやってきた」と語った選手もいますが、代表に選ばれなかった選手も含めて全員が一つになろうとした結果、仲間の動きを予測したプレイができたものと思います。史上初のベスト8に導いたジェイミー・ジョセフヘッドコーチは「チームのために、この国のために全力を注いでくれた選手たちを誇りに思う」と語っています。

ラグビーにおいては15人の選手は個々のポジションにより役割が異なっております。例えばプロップと呼ばれるスクラム最前列で支柱となる選手、フランカーと呼ばれる側面防御や側面攻撃を担う選手などがいます。これは医療の現場において異なる専門性を持つ多職種が、協働してチーム医療を実践している場面と重なります。難敵に対して自らの役割を発揮しながら戦うラグビー選手のように、医療者も困難な課題に対して各々の職種が自らの専門性と役割を担いつつ、チームで対応することが最も大切なことなのだと、改めてそのような思いに至りました。

当院はこれからも地域において信頼され、皆さまに求められる病院であることを目標に努めて参ります。地域の皆様におかれましては、今後も変わらぬご支援・ご高配を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

2019年10月23日

院長 中谷 玲二

「第 24 回 PEG・在宅医療学会学術集会」参加報告

東2F 病棟看護主任
浅利看護師

9月7日に大阪市で開催された「第24回 PEG・在宅医療学会学術集会」に参加しました。開催期間中、大阪は38℃という猛暑で会場に着くころには普段以上に濃くきめたメイクも全て落ちてしまう程でした。

そのような中、私は「パーキンソン病患者の胃瘻選択支援」という演題で発表させて頂きました。

メディア報道等から「胃瘻」=「延命」というイメージが強く、胃瘻と聞くだけで拒否反応を示される患者さん・家族の方も多くいらっしゃいます。進行性難病では身体が動かなくなることに加え、食べたり・症状を緩和する薬を飲んだりが徐々に困難になってきます。今回発表させていただいた患者さんも、治療薬が飲めなくなり食べることが難しくなった方で、確実な投薬と口から食べられない不足分を追加する目的での胃瘻を検討された

方でした。

「胃瘻は良くない」と困惑する中で「好きなものを食べたい、孫の成長を見守りたい。」という思いの変化が聞かれ、多職種が何度も本人・家族と話し合いを重ね胃瘻造設に至った症例として発表しました。

学会では胃瘻が良くないという報道の裏には、説明不足、患者・家族が完全に納得した上で胃瘻選択が出来ていない事、胃瘻後の生活を医療者が考えたり、フォローが出来ていないことが挙げられました。これらの事をなくしていくには医療者のコミュニケーション技術について再度見直すべきと意見が交わされ、色々な手法を聞くことが出来ました。一つとしては、間違った情報をすぐに訂正しない、答えを押し付けない、まずは肯定的に受け入れる等の手法で実際に面談の場でも使ってみようと思っています(実際に娘との会話で意識してみたところ、隠れた色々な思いが聞くことができました。これで夫婦喧嘩も減るかもしれないと思ってみたいと思っています)。

これからも、患者さんが入院生活の中でも楽しみのある時間が過ごせるように、多職種とも連携しながら丁寧に関り・援助を心掛けていきたいと思っています。



浅利看護師による発表



「優秀賞」をいただきました

「第9回 栄養管理セミナー」実施報告

栄養課主任
塚原管理栄養士

10月11日に洞爺温泉病院5F会議室において「第9回 栄養管理セミナー」を実施しました。

今年は最初に当院の青木看護課長が「排便コントロール」について症例発表を行い、次いで外部講師の医療法人札幌ハートセンター畠山誠先生から「出てるだけケアしてませんか?〜明日から使える排便ケアのすすめ〜」と題してお話頂きました。畠山先生は日本看護協会が認定した皮膚・排泄ケア認定看護師を取得されており全国でご講演なさっている人気の先生で、当日は60名を超える近隣医療機関のスタッフが集まりました。

厚生労働省が発表した国民生活基礎調査では、便秘だと感じている人は約470万人、日本人の約26人に

1人に相当します。便秘は女性の方が多く、高齢になるにつれ男性の方が多くなります。70歳以上になるとその割合は3倍以上になるそうです。当院には自分で動けない方、点滴やチューブから食事や水分を摂っている方も

多く、上手く排泄できない患者さんもいらっしゃいます。そうした患者さんに適切な排泄ケアをしてあげたい!とスタッフから声があがり、今回のセミナーに至りました。「どうして便秘や下痢になるの?」「3日に1回便を出さないといけないの?」「食事をしている人と長期間点滴の人は同じケアでいいの?」「どういう姿勢だとラクに出しやすいの?」などなど、分かっていたようで理解していなかったことや、当たり前だと思っていたけど当たり前ではなかったケアについて、明るく楽しくお話してくださいました。

適切な薬の選び方や、薬だけに頼らないケアについて熱く語ってくださり、参加者からは「排便コントロールの考え方が変わった!」「便を出さないと詰まることばかり考えてしまっていた」「排泄ケアがその人の人生そのもの…深く考えるきっかけになった」など、実り多いセミナーになりました。



畠山誠先生



畠山先生による講演

新入職員紹介



①竹島 英樹
②看護師
③東4階
④日々精進の毎日ですが、目の前の患者さんに納得のいく時間を過ごしていただけるよう、頑張ります。



①佐藤 彩
②看護師
③東4階
④一日でも早く仕事に慣れ、また、笑顔を絶やさぬよう頑張ります。



①中島 翔平
②看護師
③東3階
④北海道に住むのは初めてで、新しく見たり聞いたりすることが多くて楽しいです。看護でも新しいことを取り入れて提供していきたいと思います。よろしくお願いします。



①齊藤 文江
②看護師
③東2階
④以前はオホーツクの方で訪問看護を行っていました。そこで培った知識や技術を生かせるよう頑張ります。



①小野 友美
②看護師（パートタイム）
③東4階
④アロマテラピーを使って、患者さんのQOL向上や症状緩和、家族の癒しに努めます。医療者の知識の普及やセルフケアにも役立てるよう努めます。



①下村 ひとみ
②准看護師
③東2階
④7月に入職しました。スタッフの皆さんの力を借り、頑張っていきたいと思っています。



①武岡 優子
②保育士
③保育所
④7月1日に入職しました。子供たちに囲まれて、日々勉強させてもらっています。一生懸命頑張りますので、よろしくお願いします。



①後藤 則子
②ケアマネージャー
③西3F
④自分の中の1%の力を誰かの為に生きる。誰もが1%ずつでも出しあえば大きな力になると信じ、私はこれからも修行をし続けます。



①傳 珠美
②看護補助者
③西2階
④患者さんに安心していただける優しい気持ちで努力していきます。よろしくお願いします。

今春から9月にかけて当院に入職した新しい仲間です。各自の抱負を聞いてみました。
皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

① 氏名 ② 職種 ③ 所属 ④ 抱負





インフルエンザが例年より早い流行の兆しを見せています。9月に沖縄や九州を中心に患者数が急増し、道内でも地域によっては一時、流行の目安とされる1医療機関(定点)あたりの報告数が1名を上回っており、9月末1週間の全国の報告数は昨年同時期の4倍となっています。

インフルエンザウイルスの感染性は非常に強く、病院内における流行の原因はそのほとんどが感染したヒトからの持ち込みによるものです。感染を防ぐにはその通り道(感染経路)を塞ぐこと、すなわち咳やくしゃみ(飛沫)により飛び散ったウイルスからの感染を防ぐために、手洗いとマスクの着用を適切に実施し



ましょう。まずは咳がでたらマスクを着用し、体調が悪い時は無理をせず休むことが大切です。

また、ワクチン接種には発病・重症化予防効果があり、高齢者ではその後の肺炎合併や、持病の症状悪化などのリスク回避に、病院職員においては持ち込みによる院内感染や罹患による欠勤防止のため接種が必要です。ただし接種しても罹患する場合があります。微熱などインフルエンザ様症状が軽い場合も見受けられます。

まわりに罹患した方がいる場合や体調不良時には速やかに受診しましょう。



洞爺温泉病院 「夏祭り」 開催報告!

毎年恒例の夏祭りを8月21日(水)に開催しました。西棟前の屋外エリアにはテントが立ち並び、たい焼き、たこ焼きやかき氷といった屋台も出店しました。盆踊りやカラオケの催しも会場の方のご協力で大変盛り上がりしました。

屋内のリハビリテーションセンターに設けられた「射的」と「輪投げ」ゲームにもたくさんの患者さんに

チャレンジしていただき、楽しいひと時を過ごしていただけたことと思います。来年も是非ご期待ください!



輪になって盆踊り!



11月は「演芸会」です!

11月20日(水)に当院の総合リハビリテーションセンターで「演芸会」を行います。

去年は「獅子舞」、琴の演奏、保育所の児童による歌や踊り、カラオケを披露しました。今年も患者さんに楽しんでもらえる演芸会を目指しますので、皆さんぜひ会場にお越しください。



洞爺温泉病院の理念

- 個別性を尊重した医療の提供
- 信頼されるチーム医療の実践

編集後記 この度の台風19号により、甚大な被害に遭われた皆様方に、心からお見舞い申し上げます。温暖化の影響もあり、これからも大きな台風が日本に上陸することが多くなると新聞等でも報じられています。他人事と思わず自分も含め家族を守るために準備していかなければと思いました。(AH)

企画・編集

医療法人社団洞仁会洞爺温泉病院 広報図書委員会

〒049-5892

虻田郡洞爺湖町洞爺町54-41

TEL 0142-87-2311

FAX 0142-87-2260

ホームページ

<http://www.toya-onsen-hospital.or.jp>

